

## 堀辰雄 「ほととぎす」 攷 —— 「菜穂子」 への序奏 ——

飯島洋

### I

「ほととぎす」は、堀辰雄初めての歴史小説「かげろふの日記」(一九三七年十二月号「改造」)の続編として、一九三九年二月号の「文藝春秋」に発表され、一章を書き加えて同年六月創元社から刊行された単行本「かげろふの日記」に正編と共に収められた。正編「かげろふの日記」が「蜻蛉日記」上中巻を原作とするのに対し、この続編は下巻を翻案している。道綱母が不実な夫に只管に愛情を求め続けて苦悩し、ついにはその苦悩の中に慰安を見出すに至る正編に対して、愛への希望を既に失った彼女が、自分の養女に対して求婚する若い男性を翻弄し破滅へと追い込んでしまうこの作品は、「かげろふの日記」とまとめて、そこからの変容、あるいは基本的に変わらぬ主人公の姿勢などを明らかにしようとする論じ方がされてきた。ただ、

正編と比べて論じられる機会が非常に少ない。本稿では、原典「蜻蛉日記」との関係や、堀文学につきものの外国文学の影響などこれまで踏み込んでなされてこなかった分析をとおして、「ほととぎす」を堀辰雄文学史に正しく位置づけてみたい。

### II

「かげろふの日記」に関しては、堀は「七つの手紙」などで執筆動機や作品の梗概について詳細に述べている。それによれば、堀は紆余曲折の末、「男のために絶えず苦しんだ余り、いつかその苦しみなしには自分が生きておられぬかと思へるほどになつてゐる、そんなにまで自分にとつてはもはや命の糧にも等しく思へるほどな貴重な苦しみを、男は自ら与へながらそれには一向気づかうともしない、

そんな情知らずを今は反つて男のために気の毒な位に思ふ」に至る女主人公の心の動きを描いたことが作品の意義なのだという。一方「ほととぎす」については堀はあまり多くを語っていない。同じ「七つの手紙」の「その部分の方（蜻蛉日記下巻 論者注）がずつと小説的ですから、それを大いに役立てて、——こんどの仕事ではいささか物足らなかつた私の小説的欲求をその方で充分満足させてやらうかと思つてゐます」という記述と、単行本「かげろふの日記」の「あとがき」に「私の裡に突然この煩惱おほき女の日記に対する情熱が蘇り」続編を書き始め、「前編の場合、それを書き出す前にあまり用意し過ぎて、反つてそれに束縛せられがちであつた私は、こんどは全く自由な気持ちで、自己流にすべてを書くことができた」「殆ど私のフィクションであるといつても好い」とあるのが数少ない証言となつてゐる。

この記述は「ほととぎす」を考える上での基本認識となつており、堀が自由に主人公像を作り上げたということに特段疑問は挟まれていない。しかし、本当に堀はすべてを自由に書いたのか。あるいは「自由に」書くとはどのような意味においてなのか。まずこの点を原典と比較しながら考える必要がある（尚、原典引用は一九三八年東京武蔵野書院刊 久松潜一・喜多義勇編「蜻蛉日記」に拠つた）。

暗う家に帰りて打ち寝たる程に門いちちはやく叩く。胸打ちつぶれてさめたれば、思ひの外にさなりけり。心の鬼は、若し此処近き処に障りありて帰されてにやあらん、と思ふに、人はさりげなけれど、打ち解けずこそ思ひ明しけれ。

又晦の日ばかりにあり。這い入るまゝに、火など近き夜こそ賑は、しけれとあれば、衛士の焚くは何時も、と見えたり。

（兼家が他の女へ心を移したらしいのを知つて）いと悲しうて、

ながれての床と頼みて来しかども我が中川はあせにけらしも

これらの章段を見ると、「蜻蛉日記」では下巻においても道綱母は兼家との関係に相変わらず苦しみ、誠意を求め、それを得られず嘆き諍つてゐることが解る。物語的な性格を持つとしばしば評されるとおり、下巻では道綱の恋愛、養女に求婚する頭の君など多くの要素が加わつており、夫婦間の遣り取りの重要性や分量は相対的に低下する。それでも「愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつづけ」る女性像を読み取ることは出来よう。しかし引用した原典は、いずれも「ほととぎす」には取り上げられていない。

「ほととぎす」では、次のような応酬が女主人公と兼家との間に交わされる。

まずは道綱母が、かつて兼家が関係した女性との間に産まれ、いま引き取って養女にしようとしている女子を兼家に引き合わせる場面から。

「何、おれの子だつて？」と側で見てゐるのもお気の毒な位、おあわてなすつた。「それはどういふのだ。何処のだ？」

私はしかし、相変らず、冷ややかにほほ笑んでゐるぎりだった。

原典の該当箇所には

如何にく、何れぞ、とあれど頓に言はねばとあるに過ぎない。狼狽する夫を冷笑する心理を堀は書き加えている。

久し振りに訪れてきた兼家に対し冷淡な素振りを見せる道綱母に彼が逆上する情景を堀はこう記す。

「どうしてお前は、来てくれない、憎い、悔しいと、おれを打つなり抓るなりしないのだ」などとお言ひ続けになつた。私はしばらく打ち伏したまま無言で聞いてゐたが、稍たつてから、やつと頭をもたげ、「わたくしの方で実は申し上げたかつた事を、そのやうに何もかも御自分で仰られてしまひましたので、もう私の

申し上げたい事はなくなりました」と言ひながら、私はいつか自分がいかにも気味よげにほほ笑みだしてゐるのを感じてゐた。

原典では

などか来ぬ、訪はぬ、憎し、あからし、とて打ちもつみもし給へかし、と言ひ続けらるれば、聞ゆべきかぎり宣ふめれば何かは、とて止みぬ。

とあるに過ぎない。本来は自分の方が苦しんでいる筈なのに、自分の態度によつて夫が苦しむのを見て喜びを感じる自分、そうした自分をみつめる第二の自己が、堀によつて作り出されている。

去年までは家の柱などに御守札などを押し付けてあつたりするのを目に入れると、この夢ほど惜しいとは思はれない生をさも惜しんでゐるかのやうな気がされて、自分らしくない事だと心苦しかつたが、今年はどういふものか、さう云ふ厄除けのやうなものすら無関心に見過ごされ、

これには

かくのみ憂く覚ゆる身なれば、此の命夢ばかり惜しからず覚ゆる。この物忌どもは柱に推付けて見ゆるこそ、若しも惜しからん身のやうなりけれ。

という記述が対応している。前段には道綱母宅の隣家で火

事があつたのに關し、「問ふべき人は訪れもせず。さしもあるまじき所々よりも問ひ尽して、このわたりならんやの疑ひにて、急ぎ見えし世々もありしものを、ましてもなり果てにけるあさましさかな」と記している。兼家が自分に對し薄情になりきつてしまったことへの嘆きが原典には述べられていたが、それは捨象されてしまった。このような操作を介して、道綱母の情念は頭の君に集中されていくこととなる。

堀は兼家に関する記述では、原典をかなり大胆に削除し、心理を潤色し、あるいは時間を前後させ、情景に多少手を加えている。また日々の出来事を記す場面を削除する場合、たとえば隣家の火事の記事を削つた例などでは、その前の祭りの記事「公は八幡の祭の事とのゝしる。我れは人の詣づめる所あめるに、いと忍びて出でたるに、昼つかた帰りたれば、主の若き人々いかで物見ん」云々の部分を「此の春は、祭や物詣などにその少女が珍しがつて往きたさうにしてゐるので、さう若いものばかりだけを出してやることも出来ないのです、私も連れ立つて一しよに出かける事も多い多かつた。」として、物忌の記述に繋げるなどしている。こうなると独自の場面が書き加えられたように見える。しかし原典にない事件を作り出してはいない。

堀の創作は基本的に人物の心理や、主人公が述懐などす

る場面・情景に限られる。その点は大森郁之助氏が「かげろふの日記」について指摘した<sup>三〇</sup>のと変わらない。ただし「ほととぎす」では原典の夫への愛を相変わらず求める姿勢から、夫への冷淡さ、諦めの強調へと転向しており、原作に言葉を補つて「心理的秩序」を与えようとした正編と比べて心理描写に関する堀の「自由」の幅は広がっている。

### III

「ほととぎす」では兼家の存在は背景に遠のき、道綱の上司にあたる好色の貴公子、頭の君こと右馬頭遠度を軸に物語が展開する。頭の君は道綱母の養女撫子との結婚を認めるよう執拗に要求し、それを道綱母が頑迷に拒絶する。惑乱した頭の君は他人の妻（原典では「もとの妻」）を盗み出す。この下巻において、堀がどのような脚色を施したのかを検証する。

頭の君が登場する「ほととぎす」の「その二」の冒頭を稍長いが引用する。

もう一年余も披かなかつた此日記を取り出して、それにまだかう云ふ氣もちではついでこれまで向つた事もないやうにさへ見える、心のときめきを感じながら、

いま、夜の更けるのも私は知らずに自分にとつて附けても附けなくとも好いやうなものになりかかつてゐた此日記を、再びこんな切ない心もちで手にとる事があらうとは、夢にも思はなかつた事である。

頭の君がお立ち去りになつて往かれたのは、もう余程前のことであらう。その跡、私はながいこと、灯をそむけたまま、薄暗いなかに、ひとり目をつむつてゐた。いつまでもさうしながら、自分でも何をとははつきりと分らないやうなものを考へて追ひ続けてゐた。そしてその自分でもはつきりとは分らないもののために自分の心が切ないほど揺らいでゐるのを、私もまた切なくそれを揺らぐがままにさせてゐた。

若い青年に心動いたことを告白するこの情景に対応する記述は原典には存在せず、すべて堀によつて創出された。直前では女房たちが時鳥の声を聞いたと言ひ合つてゐるのに自分はまだ聞いていないのを受け、「……恐らくこの頃自分自身にさへ見向きもされなくなつてしまつた自分の物思ひが、毎夜のやうに自分の裡から抜け出して、時鳥となり、あちらこちらを啼き渡つてゐるのだらう」などと考へ「悶を晴らす歌を詠むが「それを誰に見せようでもなく、私はそこいらの紙に書き散らしては、それがそのまま失せるのもよいと思つてゐた」と述べられる。これは原典の「我

れぞげにとけてぬらめや時鳥物思ひまさる声となるらん」が対応するが、重大な変更点がある。原典でこの後に続く兼家来訪、近所の火災、転居、兼家の身勝手な仕立物依頼など、兼家との関係の苦悩にも関係する一年以上にわたる記事が削除され（一部は別の箇所を利用して）、日記は「一年余も」捨て置かれたものとされた。その上で原典の和歌では自分の嘆きが時鳥の声になると詠まれているのに、堀はその嘆きを自分自身から切り離され独立したものとした。道綱母が兼家への愛を完全に断念したことを示しており、また書いた歌を失せてもよいとするのは頹廢に近い絶望とも読める。こうした操作によつて、道綱母の情念が一旦は死に絶え、それを頭の君が蘇らせていることが示される。

頭の君については、「女主人公に対しても錯乱した感情を寄せる」などと評され、道綱母の翻弄によつて養女から彼女自身へ愛情を感じるようになり、そして、原典では単なる好色の公達に過ぎない頭の君が独自の役割を与えられていると考えられている。堀が二人の関係に對しいかなる操作を加えているのかを検証しよう。

最初の対面では特に求婚の話題には進まず、頭の君の上品な様子が描写されている。彼への「絵に描いたやう」という評、彼に自分の姿が見られたことへの「死ぬほど羞か

しい思ひ」は原典で「絵にかきたるやうなり」「死ぬればかりいとほし」とあるのに対応する。ただし道綱母の頭の君への好意の一端を示す。「思つたよりも品の好きさうな御方だこと」そんなことを思ひながら、私は簾ごしにその後姿をいつまでも見送つてゐた」は原典にはない。

二度目の訪問、「似げない事、故に、怪しの声さてやは、などあるは、許しなきを、助に物聞こえん、と言ひがてら暮れに物したり」と、結婚を認める気持ちがないのを頭の君が理解していならしいことを述べる原典が、堀の手によつて「本当にあなた様にだけでもお目にかかつて、わたくしの真実な気もちをお訴へしたいのですが、自分の老いしやがれた声などどうしてお聞かせ出来よう、などといつても仰せられて私をお避けになるのは、まだ私をお許し下さらぬからだと思はれます」などと怨んでよこし」と改変される。頭の君が、結婚を許そうとしない道綱母の心情を見抜き、それを怨むという設定がなされている。

また同段では、二人の対面中、頭の君のいた縁の灯火が消え、道綱母の側のそれは点いたままだったことに頭の君の立ち去り際に気づく場面がある。「影もや見えつらんと思ふに、あさましようて、腹黒う消えぬとも宣はせて、と言へば、何かは候ふとも答へて立ちにけり」と配慮のなさに呆れる原典に対し、堀は道綱母の長い内省を書き加える。

私はその跡、自分の近くの灯をそむけて、薄暗いなかひひとりそのままだつと目をつむつてゐた。そして私はその目のうちに、自分自身のかうしてゐる姿を、ついでしたが頭の君に偷見せられてゐたでもあらうやうな影として、何と云ふこともなく蘇らせてゐた。

それは半ば老いて醜く、半ばまだ何処やらに若いときの美しさを残してゐた。さうしてゐるうちに、私がだんだん何とも云へず不安な、悔やしいやうな心もちに駆りやられていつたのは、さういふ自分の影がいつまでも自分の裡に消えずにゐるためばかりではなかつた。それはさつきあんな狼狽を見せて頭の君をたしなめたときの、自分自身を裏切つた、自分の囁れた声はまだそこいらにそのままそつくりと漂つてゐるやうな感じのし出して来たためだつた。

頭の君は特別に道綱母に対して感情を示してはいなかつた。しかし彼女はまだ男性から愛されうるかどうかという微妙な存在として自己を凝視し、若い男に対して囁れた声を発して男性に対して自らの老いを示してしまつたことに動揺し、悔やむ。彼女は頭の君の心情に関係なく、恋情にも似た心の葛藤を作り出している。

三回目の訪問では、四月と思われた結婚が八月に延期されたのを受けて頭の君が「契り置きし卯月は如何に時鳥我

が身のうきにかけはなれつゝ、如何にし侍らまし、屈しいたくこそ」と書いてよこす。堀はこれに「どうして私にばかり頭の君はさう怨むやうな事を言つて来られるのだからかからない」という道綱母の述懐を添える。次の場面で「責むるさまいとわりなし」という記述もあるが、頭の君の悶えが道綱母にのみ向けられていることに注意するようなことは書かれていない。二人の間の特殊な感情を彼女が仮構したととれる描写を堀は添加している。

四月末になると、原典においても頭の君の言動は異常さを見せる。養女への求婚をかわし続ける道綱母に対し、「胸はしるまで覚え侍るを、此の御簾の内にだに候ふと思ふ給へまかでん。一つくをだに為すことにし侍らん、かへりみさせ給へ」といひて簾に手を「かけるに至る。これに堀は潤色を加え、「何故、さう私にはつらくおあたりになるのでせう。まあ、さうまで仰やられなくとも。——いいえ、もう私はなんだか自分で自分が分かりませぬ。せめて、その簾のなかへでも入れさせていただけましたら……」だんだん興奮してきながら、何を言つてゐるのだから自分にも分からないやうな事を言ひ続けてゐるやうに見えた頭の君は、そのとき突嗟に——どうしてもさう考へてやつたとは思はれないほど突嗟に——ずかずかと簾の方に近づいて、それに手をかけさうにせられた」とする。頭の君をこうし

た状態に追い込む道綱母側の直前の言動は原典とほぼ変わりない。しかし、彼は錯乱し、理不尽な被虐を感じ、自分の考えが判らなくなつてしまひ、道綱母からも「考へたやつたとは思はれない」とみなされる。これをして頭の君が道綱母に対して特殊な感情を抱いているとは判断できないが、女主人公は意図せずして彼を翻弄し、彼は彼女に苦しめられるという設定がなされている。また、ここでは頭の君が、道綱母は自分を苦しめようとしていると明確に認識している点が注目される。

また、「ほととぎす」では道綱母は後日この時の頭の君の悶える様子を思い出し「どうかして縁の方から橘の花の重たい匂ひが立つてきたりすると、いつかその簾のそとに打ち萎れてゐた、若い頭の君の艶な姿が、ふいと私には苦しいほどはつきりと佛に立つたりするのだつた」と述懐する。これは堀が添加した表現で、相手の苦しみが自分の感情を動かし、好意とも解釈できる情念を生じさせたことを示している。

道綱母に窘められた頭の君が消沈しつつ彼女の前から引き下がる際、「ほととぎす」での彼女は彼が持ち込んだ橘の香りから「その一瞬前の何んとも云へず好かつた花の匂を記憶の中から再びうつとりと蘇らせ」るが、こうした記述は原典にはない。頭の君をあしらう立場の道綱母が彼に

好意を感じていることを示している。その直前では彼女は彼に対して、原典の「いとなつかしさに」をほぼ踏襲し「さすがに少しお気の毒になつて」という程度の感情しか持たなかつた。頭の君が目の前から消えるという動きによつて道綱母の情念が揺り動かされている。

その翌日には頭の君は道綱母に「あやしうわななきたる手にて」「昔の世に如何なる罪を作り侍りて、かう妨げさせ給ふ身となり侍りけん」云々という文を寄せる。堀はそれに道綱母の「さすがに胸が一ぱいになつて」という感情を添加し、頭の君の苦悩に心動かされる姿を造形している。

兼家が妻と頭の君の関係を疑つてみせたのに対し「今更に如何なる駒かなづくべきすさめぬ草と逃れにし身を」と詠んで送つた。頭の君が訪問した際、兼家書状に自分で書き付けた「いまさらにかなる駒かなづくべき」という歌の部分破つて省いて頭の君に詠ませたつもりが、見せまいとした方を見せてしまったことに気づく。この悶着もほぼ忠実に引き写されているが、「ほととぎす」では歌に書付について「自分で自分を嘲けるやうに一ぱいに散らし書きをした」との注釈がなされる。

頭の君が先妻を盗み出した後、道綱母に寄せた「いであなあさましや、心にもあらぬ事を聞こえさせはつべきにも、すさまじからぬ筋にても取り聞えさすること侍りしかば、

さりととも」という文に、堀は「どうしても一度なりとあなた様のお目にかかつてしみじみとお語らひしなかつたのだらうと、悔やまれてなりませぬ」、そして芥川龍之介が片山弘子を思慕して詠んだと思われる旋頭歌「風にまひあたるすげ笠の なにかは路に落ちざらん。わが名はいかで惜しむべき。惜しむはきみが名のみとよ。」<sup>(註)</sup>の一部「をしむはきみが名」を書き添え、それを読んだ道綱母に「薄氷がひとりでに干われるやうな、うすら寒い、なんとも云へず切ない気もち」を感じさせる。

その他にも、頭の君が執拗に養女への求婚を道綱母にせがみ、彼女が頑迷にそれを拒絶するという場面は原典に幾つか見られ、「ほととぎす」もそれを、省略や順序の入れ替えを行いつつ基本的には踏襲し、独自の二人の邂逅は設定されていない。

そしてまた、頭の君の行動にも殆ど変更は加えられていない。彼は「ほととぎす」においても、出奔後の手紙での「をしむはきみが名」という暗示を例外として、道綱母に求愛などしていないし、原典以上に彼女に対して踏み込んだ行為に至つてもいない。堀の操作は道綱母と頭の君の、互いの言動の受け止め方に集中している。堀は頭の君に、道綱母が自分を苦しめるようとしていると捉えさせ、道綱母には、頭の君が自分を怨んでいると意識させ、それによ

つて自分の頭の君への特殊な情念や苦悩を認識させている。

#### IV

二人の主要人物が繰り広げる場面は大きく変わらないまま、堀は蜻蛉日記下巻を、苦しめ苦しめられる重苦しい心理劇の舞台へと変更した。好色な青年の求婚を退け続けるうち、頭の君側の手紙の文句は「なぜか知ら、いよいよ空疎なものに見えてくる」のに道綱母は気づき、彼が出奔した後には彼女は「あの方のお気持ちをわざと焦らし抜いて、御自分で御自分かもう何を欲していらつしやるのかさへ見分けられないやうにおさせして、とうとうこんな思ひがけないやうな結果にならせてしまつたのは、この日頃の私、——いつの頃からか男のいふ男のあらゆる運命に対してともすれば皮肉になりがち、しかもそんな自分を自分でもどうしやうもない、この私の所為だつたのではなからうか。そんな気にも私はどうかすると兼ねないのだつた」と内省している。「男のあらゆる運命に対してともすれば皮肉になりがち」というのは、頭の君の求婚の熱心さを勘案するならば、愛情や結婚の幸せを信じて疑わない男性を冷笑する態度と解釈できよう。頭の君は、最後まで道綱母への

恋情をはつきりと表明はせず、道綱母の方も、彼を弄び苦しめてやるうと考へて行動してはいなかつた。

作品の最後で堀は尤もらしい「心理的秩序」に適つた説明を道綱母にさせている。先行研究でもこの記述は疑念なく受け入れられ、「かげろふの日記」において、夫によつて苦しめられることに自虐的に作用した情念が、ここにおいて、青年を出来る限り苦しめようとする加虐適志向に転化した」<sup>51</sup>といった説明がなされる。確かに「ほととぎす」では、頭の君の己の苦衷を訴える文を読み、道綱母は「私はつい知らず識らずの裡に、苦しんでゐるのが相手の方であるときいつも自分の内をひとりでに充たしてくる、一種言ふに言はれぬ安らかさを味ひ出してゐる自分自身を見出さずにはゐられなかつた」という。道綱母にとつて、相手の苦痛が自分に安心をもたらず。ひたすら兼家の不実な苦しめられた彼女が自分の存在について精神的安定を得るために辿り着いた地点であつたといえる。

しかしその場合、ひとつ説明のつかない問題が生じる。堀が道綱母の頭の君に対する態度に書き加えた、本人もはつきり恋情とは判っていない、好意のような感情との整合性をどうつけるのか。なぜ愛情とも呼べるかもしれない情念を抱く対象である青年を彼女は破滅にまで追い込むのか。たとえば頭の君への感情を「飽かぬ心」のひきおこ

す「嘆かひ」、ロマネスクな生への祈念の変形」と捉え、「それが夫によつて充たされないゆえに怨念となつて、このような魔的な作用を青年に働きかける」とする解釈がある。しかし、既に見たとおり「ほととぎす」での夫に対する感情は原典と比して殆ど冷笑的な諦念にまで減却されておられ、「怨念」が道綱母を二二まで駆り立てるとは断じ難い。またその怨念が何故養女に求婚してきた頭の君に作用するのか。少なくとも合理的には説明がつかない。

非合理的な情念は元来、必ずしも堀に近しくはなかつた。彼は二十世紀フランス文学を積極的に取り入れたが、「ほととぎす」以前の関心は、「聖家族」ではレーモン・ラディゲ Raymond Radiguet に倣つた私小説的方法の拒否と明晰な心理描写、「美しい村」ではマルセル・ブルースト Marcel Proust に学んだ息の長い複雑な構文と無意思的記憶の記述、「風立ちぬ」ではライナー・マリア・リルケ Rainer Maria Rilke の理念による、運命を越えた生、既にこの世にはいない愛する者への態度の叙述、といったところにあつた。「聖家族」の場合、登場人物にも語り手にもどういふものか断定の出来ない感情が「らしかつた」「やうだつた」という措辞によつて記述され、心理の神秘さが描かれるが、それは不合理なものとは性格が異なる。

しかし、実作には未だ示されなかつたが、堀は登場人物

自身にも説明の出来ない不合理な心の動きに、「ほととぎす」以前に関心を示している。最初は「小説のことなど」(一九三四年七月号「新潮」)に現れる。堀はこれまでの自分の短編小説が「複雑な気持」を盛り込めなかつたことを反省してみせた後、フランソワ・モーリヤック François Mauriac の「小説論」《Le Roman》(Artisan du livre 一九二八年)の記述を繰り返し引用して新しい小説観を披瀝する。

今、この小論文を終へるにあつて、私はもう一度、モリアックのテクゼを繰り返して置きたい。即ち、一方では論理的な、合理的な小説を書きたいといふ欲求、また一方では、不合理、不確かさ、複雑さをもつた生きた人物を描かうといふ欲求、——われわれはその二つの欲求の戦場であるがいい。……これは何も仏蘭西のみに限つた問題でなく、私達の間でも大いに考へていいことだと信ずるので、此处にその問題にアンダラインして置くのだ。

また、「モリアックのこと」(一九三六年三月号「作品」)原題「モリアック礼讃」で、「現代作家の中で誰が一番好きかと問はれたら、僕は躊躇せずにモリアックの名を挙げる」「テレエズ・デケイルウ」なんかは、夏から秋にかけて、三遍ゆつくり読み返した位だ」と述べ、

「テレーズ・デスクール」  
「Thérèse Desqueyroux」を高く評価する。凡庸な夫の存在に言いようのない苦しみを覚え、彼を毒殺しようとして果たせなかったテレーズの悲劇を描いたこの小説に対し、堀は「この可哀さうな毒殺女の気持のよく描けてゐることと云つたら！恐らく読者には、テレーズ自身よりも、彼女の夫を毒殺するに至るまでの心理が、はつきりと辿れるのだ。何故ならテレーズには、彼女自身の上してゐることを殆ど意識してゐないやうな瞬間があるのだが、さういふ瞬間でさへ、読者は、彼女がうつろな気持で見つつかある風景や、彼女の無意識的な動作などによつて、彼女がその心の闇の中でどんなことを考へ、感じてゐるかを知り、感ずることが出来るのだ」と述べる。登場人物自身にははつきりと捉えられていない、矛盾した非合理的な、他者を破滅させかねない心の動きに、堀は以前から関心を寄せていたことが判る。

その「Thérèse Desqueyroux」では、主人公のテレーズが夫に何故自分を毒殺しようとしたかを問われ、「こう答える。  
「J'allais vous répondre : « Je ne sais pas pourquoi j'ai «fais cela » ; mais maintenant, peut-être le sais-je, figurez-vous ! Il se pourrait que ce fût pour voir dans vos yeux une inquiétude, une curiosité — du trouble enfin : tout ce que depuis une seconde j'y découvre. »

私はこう言おうとしたのです。「何故そうしたのか解らない」と。でも今ではそれが解るんです。あなたの眼の中に不安、好奇心、つまり心の動揺を見るためだったのかもしれない。さつきから私があなたの眼に私が見つけているものを。（拙訳による）

道綱母が自分自身でも持て余している不可解な心の動きは原典の外からやってきた。そしてそうした心理は堀のこれまでの作品には顕在化していない問題であった。これは一九三五年前後に出会ったフランソワ・モーリヤックの読書体験で発見した、相手の心を混乱させようというテレーズが最後に自分の内部に見出した志向を意識したものといえるのではなからうか。

## V

「ほととぎす」で繰り広げられる心理の劇は、道綱母と頭の君の間にはとどまらない。頭の君が求婚する、道綱母の養女、撫子もこれに加わる。とはいへ、撫子は原典での影の薄さと変わらず、作品中では一言も言葉を発することなく、自分の意思を示すやうな行動を起すこともなく。しかし彼女を前にして道綱母は、いくつかの場面で心理の動揺を見せる。頭の君が道綱母との面会で取り乱し、二人

を隔てる簾の中に踏み込もうとした事件の後、彼女は述懐する。

私も私で、撫子などを相手に、再び昔に返つたやうな無聊な日々を迎へ出してゐた。昔に返つたやうな？

——しかし、それらの日々は前よりかもつと無聊でもつと重くろしいところのあるのを認めない訳にはいかなかった。私はそれをば撫子にも話して置かねばならない事をまだ話してゐないことの所為にしてゐた。

道網母は二人の間の重苦しい雰囲気を、撫子に求婚者のことを話していない「所為に」している。これは自分に対しての誤魔化しといえよう。道網母はその後頭の君の焚き染めた匂いを「うつとりと蘇らせ」、また彼の「艶な姿」を思い浮かべたりしており、彼に対して自分の抱えている感情が異性に対しての好意と呼びうる物かも知れないことを直観し、その感情を恐れたと思われる。

養母が「いまさらにかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」の歌を兼家に贈つた後に、このような描写がある。

撫子の方も撫子で、この頃は何か鬱いだやうにしてゐる。日ねもす、閉ぢ籠つたまま、琴などを物憂さうに掻き撫でたり、さうかと思ふと急に止めたりして、少しいらいらしたやうにして暮らしてゐる。(略)私

は絶えてここ数年といふもの感じたことのないやうな気が、さういふ何処へも持つてゆき場のないやうな気もちを、撫子なんぞのために思ひがけず蘇らされたやうで、——しかし、今の私にはその昔日の堪へ難さそのものさへ、それと一しよにそれが自分の裡に蘇らせるもののためにか、反つて不思議に懐かしい気のものだつた。

果たして撫子が、養母と求婚者の間に特殊な感情が生じようとしていることに感づいているかどうかは、明確には読み取れない。しかし撫子の「持つてゆき場のないやうな気もち」に動かされて彼女自身も同様の思いが萌すという。そして道網母は先に頭の君の「艶な姿」を「苦しいほどはつきりと」思い浮かべたりしている。夫との間に交通させることは断念した愛情が、愛とまではいえないにしても思慕の情として頭の君に向けられていた。しかしそれは成就がありえず、自らもはっきり認めてはいないゆえ、己の内部に鬱積させるしかない。彼女は養女の憂鬱な様子から、自分の中に蠢動していたその感情を意識させられる。

また、先の歌を誤つて頭の君に読ませてしまつた後、このやうに書かれる。

私はふと口を衝いて出たその文句が自分の胸を一ぱいにするがままにさせながら、なぜか知ら、撫子の悲

しい目ざしを空に浮かべだしてゐた。いまにも私に物を言ひかけさうにして、しかしすぐ何にも言ふまいと、あきらめてしまふやうな、撫子のしをらしい目ざしが、それまでついぞそんな事はなかつたのに、その夜にかぎつて私の目のあたりからいつまでも離れなかつた。

頭の君に対して単に娘への求婚者として以上の情念を揺らめかせていることに、撫子は気づいているかもしれない。あるいは養母を咎める思いがあるのかもしれない。それらは眼差しに暗示されるにとどまり、道綱母も読者も推測するよりほかないが、道綱母はその視線を忘れることが出来ない。自分の情念を内省せざるを得なかつたと考えられる。さて、娘が思いを寄せる（撫子が頭の君を愛しているかどうかは判らないが、求婚の相手ではある）男性に母が心を動かし、それを知つた娘が苦惱するという構図の用例が既に堀にはある。一九三四年十月号「文藝春秋」に発表された「物語の女」では、中年にさしかかつて、知り合つた小説家の森から愛情を示されて苦惱する三村未亡人が描かれ、そんな母の様子を目にする娘菜穂子も彼女なりの理由で苦しむ。作品冒頭近くで未亡人は考える。

それにしても、此頃のお前は どうしてこんなに私と言葉を交すのを避けてばかりあるのかしら？何かお互に傷つけ合ひさうなことを私から云ひ出されはせぬか

と恐れておいでなのではない。却つてお前の方からさういふことを云ひ出しさうなのを恐れておいでなのだとしか思へない。この頃のこんな氣づまりな重苦しい空気が、みんな私から出たことなら、お兄さんやお前にはほんたうにすまないと思う。かうしい鬱陶しい空気がますます濃くなつて来て、何か私たちには予測できないやうな悲劇がもちあがらうとしてゐるのか、それとも私たち自身もほとんど知らぬ間に私たちのまはり不起り、そして何事もなかつたやうに過ぎ去つて行つた以前の悲劇の影響が、年月の経つにつれてこんな目立つて来たのであらうか、私にはよく分らない。未亡人が非公式に森から求愛されたことは、菜穂子たちに明らかにされてはいない。しかし未亡人はそれから「なんとなく胸苦しいやうな雰囲気のなかに暮らし」はじめる。すると菜穂子はそれを読み取つたのか、鬱陶しい雰囲気が家庭を支配するようになる。

末尾では菜穂子の變貌に未亡人が氣づく。

さういふお前も、いつになく快活さうだつたあの日以来、急にまた前にもまして氣むづかしい顔をしたしてゐるので、何んだか私はお前と顔を合はせるのを避けたいやうな氣もちになればなるほど、私にはお前の心がますます分らなくなつて来て、それが氣になつて

ならなかつた。

菜穂子は自分の考えを言葉によつて母に伝えることはなく、それは未亡人との間に展開される重苦しい雰囲気に暗示される。

「ほととぎす」の母親が娘への求婚者に情念を揺らめかせるという筋書きは、「物語の女」の未亡人が娘が思慕するのと同じ男性に愛情を打ち明けられて惑乱するのと相通じるものがある。それだけでなく、表面的にはそれが修羅場にも愁嘆場にも至らず、ただ解決される方途のない悲劇的な雰囲気だけが広がって登場人物を苦しめる点で、「ほととぎす」は「物語の女」と共通している。さらにいえば、森が未亡人に送った雑誌の切り抜きに書かれ、愛情の暗示となつた言葉「われをこそ君は愛さん、われ君を苦しめたれば……」は、苦しめることによつて苦しめられた側に愛情が生じることを主張しており、この構図は道綱母に翻弄され苦しめられた挙句に、彼女への情念を掻き立ててしまふ頭の君に受け継がれる。その部分は原典「蜻蛉日記」には存在しない堀の潤色であり、堀は「ほととぎす」執筆時に「物語の女」を意識していたと考えられよう。

## VI

「物語の女」は七年後、改稿されて「菜穂子」の前編「榆の家」として蘇る。この改稿で最も大きく変化したのは、「物語の女」では菜穂子は（少なくとも母未亡人からの視点では）母親に求愛してきた森に恋愛感情を抱いて母親に嫉妬していたのが、「榆の家」では菜穂子は母親が森を愛するようになり自分から離れてしまつたと悲しむというように改訂されている点である。たとえばこのような例が挙げられる。

数年間私の苦しんでゐたこの部屋に、お前はいつかその私と同じやうな苦しみを苦しむために、しばしば這入つてくるやうなことがあるかも知れぬ。（「物語の女」）

数年間秋深くなるまでいつも私が一人で居残つていたこの家に、お前はいつかお前の故に私の苦しんでいた姿をなつかしむために、しばらくの日を過しに来るやうなことがあるかも知れぬ。（「榆の家」）

「何処へ行つていらしたの？」と私に訊いた。私はお前が私を嫉妬してゐるらしいことを苦しいほどはつきりと感じた。（「物語の女」）

「何処へ行つていらしたの？」と私に訊いた。私はお前が私のことでどんなに苦い気もちにさせられてゐるかを切ないほどはつきり感じた。（「榆の家」）

娘は母親が未亡人という立場でありながら男性とかかかって苦しむ姿をみて苦惱し、愛などという儂い情念に身を委ねることを拒否する姿勢を培ってゆく。

「ほととぎす」はこの改訂作業の直前に位置し、愛する女と少女から大人への家庭で苦しむ少女の姿勢を反復している。何故撫子が「悲しい目ざし」をするのか、「いまにも私に物を言ひかけさうにして、しかしすぐ何にも言ふまいとあきらめてしまふやうな、撫子のしをらしい目ざし」は、母親に如何なる思いを訴えようとしていたのか直接説明はされない。しかしこの姿勢は、「何処へ行つていらしたの」と言つて母に「嫉妬」の眼差しを向ける「物語の女」より、「じつと空を見つめ」、「もうすっかりお前の心のもとへ出て行つてしまつて、もう取り返しのつかなくなつたものでもあるかのやうに、私のことを考えて」いるらしいと母親に思わせる、「楡の家」の菜穂子に、より抑制的で、また変わつてしまつた母を嘆く点で性格的には近いと思われる。

また、非合理的な感情に惑乱し、他人の苦しみによつて自己の安定した存立を図ろうとする人間像を学び取つた「Thérèse Desqueyroux」は、主人公の人物像と行動様式の多くに影響を与えた点で、「菜穂子」の成立に——尤も両作品の類似点は瑣末なものばかりという見方もできるが

——大きなかわりを持つている。

「ワレワレハ（ロマン）ヲ書カナケレバナラヌ」と一九二九年八月三十日の日記に記したとおり、堀辰雄にとつて本格的な虚構の長編小説を書くことは年来の宿願であつた。初期の代表作といえる「聖家族」では、「これを書くのに少し自分の苦痛を利用した嫌ひがないでもない」とと、私小説的要素が入り込んでしまつたことを悔いた<sup>110</sup>。「美しかれ、悲しかれ」（一九三九年十二月号「文藝」）（初の題名は「旧友への手紙」）によれば、「美しい村」や「風立ちぬ」も、「これから私のしようとしてゐる長い他人との対話であるべき新しい仕事から見れば」「ほんの私のモノローグに過ぎ」ないという。結果論としてみればその試みは「菜穂子」へと持ち越されたことになっている。その中で、「自分以外のものへの熱心な話しかけ」（同）と位置づけられた「かげろふの日記」の続編で、しかも「全く自由な気持ちで」書いたという「ほととぎす」は、「他人」を主人公とした最初の作品「物語の女」を、二代に渡る女性の人生を描く「菜穂子」へと結実させる上で、その女性像の形成において大きな意義のあるレッスンとなつたと考えられる。

（注）

- (一) 一九三八年八月号「新潮」(初出では「山村雜記」)
- (二) 「たけ高き女」の種姓―堀辰雄の「かげろふの日記」における自己限定」(「札幌大学紀要 教養部論集」一九六八年三月)
- (三) (二)に同じ
- (四) 「相聞 三」、一九二五年四月成立と推定されている。
- (五) 竹内清己「堀辰雄の文学」(桜楓社 一九八四年三月)所収『「かげろふの日記」『ほととぎす』―情念の鎮魂譜―』
- (六) (五)に同じ
- (七) これについては拙稿「聖家族」の心理描写」(「国語国文」二〇〇三年一月)で述べた。
- (八) 大森郁之助「堀辰雄・菜穂子の涯」(風信社一九七九年十二月)に詳細な分析がある。
- (九) (八)に同じ
- (一〇) 「聖家族」限定版に」(一九三二年二月刊「限定出版江川書房月報」所収)
- (一一) 「聖家族」の私小説性については、拙稿「聖家族」の「法」(「京都大学国文学論叢」二〇〇四年一〇月)を参照されたい。
- (いいじま ひろし・県立館林高等学校教諭)